



2 学年便り

令和5年10月30日 10月号

大和市立下福田中学校

文責 2学年主任

国語の授業で、昨年引き続き演劇を活用した授業を行いました。平家物語の「扇の的」を題材に、グループで劇を作り上げる授業です。この授業では、お互いの考えの違いを知り、相手の良さを認め合うことを学びました。

演出家の田野さんをはじめ、フロの俳優さんたちが、アドバイスをたくさんしてくれました。発表の場面では、大きな拍手に背中を押され、どのグループも素晴らしい劇を披露しました。

劇化した教科書の場面

時は二月十八日、午後六時頃のことであったが、折から北風が激しく吹いて、岸を打つ波も高かった。舟は、揺り上げられ揺り落とされ上下に漂っているの、竿頭の扇もそれにつれて揺れ動き、しばらくも静止していない。沖には平家が、海上一面に舟を並べて見物している。陸では源氏が、馬のくつわを連ねてこれを見守っている。どちらを見ても、まことに晴れがましい情景である。与一は目を閉じて、

「南無八幡大菩薩、我が故郷の神々の、日光の権現、宇都宮大明神、那須の湯泉大明神、願わくは、あの扇の真ん中を射させたまえ。これを射損じれば、弓を折り、腹をかき切って、再び人にまみえる心はありませぬ。いま一度本国へ帰そうとおぼしめされるならば、この矢を外させたもうな。」

と念じながら、目をかっと開いて見ると、うれしや風も少し収まり、的の扇も静まって射やすくなっていた。

与一は、かぶら矢を取ってつがえ、十分に引き絞ってひょうと放った。小兵とはいいいながら、矢は十二束三伏で、弓は強い、かぶら矢は、浦一帯に鳴り響くほど長いうなりを立てて、あやまたず扇の要から一寸ほど離れた所をひいふっと射切った。かぶら矢は飛んで海へ落ち、扇は空へと舞い上がった。しばしの間空に舞っていたが、春風に一もみ二もみまれて、海へさっと散り落ちた。夕日に輝く白い波の上に、金の日輪を描いた真っ赤な扇が漂って、浮きつしづみつ揺れているのを、沖では平家が、舟端をたたいて感嘆し、陸では源氏が、えびらをたたいてはやし立てた。

あまりのおもしろさに、感に堪えなかったのであろう、舟の中から、年の頃五十歳ばかり、黒革おどしの鎧を着、白柄の長刀を持った男が、扇の立ててあった所に立って舞を舞った。そのとき、伊勢三郎義盛が、那須与一の後ろへ馬を歩ませてきて、

「御定であるぞ、射よ。」

と命じたので、今度は中差を取ってしっかりと弓につがえ、十分に引き絞って、男の頸の骨をひょうふっと射て、舟底へ真っ逆さまに射倒した。平家方は静まりかえって音もしない、源氏方は今度もえびらをたたいてどっと歓声を上げた。

「ああ、よく射た。」

と言う人もあり、また、

「心ないことを。」

と言う者もあった。



誰が扇の的を射るか、相談している場面



ダンスパフォーマンスも披露



さまざまな与一達

生徒にとって、苦手意識のある古文も身近に感じてもらえる取り組みです。



きめのポーズ

